

An Essay on “Julius Caesar”

Masahiko Yokomori

“Julius Caesar” 試論

横森 正彦

シーザー 試論

— Double Theme —

I

この作品は、二・三人の人物の心理的な動きを示すものである。しかし、作品の題名にもかかわらず真の主人公はブルータスがシーザー精神に排戦するという関係のなかにみいだされる。原作に対する忠実度がもっとも高い。原作はシェイクスピアが好んだ古典作家プルタークである。ギリシヤのモラリストで歴史家、ギリシヤとローマの政治家の伝記である「英雄伝」を書いた人である。プルタークがヨーロッパに初めて紹介されたのは、1559年のジャック・アミヨの仏訳である。この書物はフランスの思想の一部となり、特にモンテーニュはそれをもっとも愛読した人物である。また、この書物はフランスの思想に影響をもたらし、フランス革命の原動力の一つとなっていた。すなわち、プルタークがその一つとなったのである。シェイクスピアがプルタークを⁽ⁱⁱ⁾読んだ(2579年サー・トマス・ノースがあのアミヨのフランス語版を英訳をする)ことは、19世紀の英国詩人ジョン・キーツがチャップマン(シェイクスピアと同時代)によるホメロス訳を読んだことと同じように新しい世界を開示したのである。ところで、シーザーの材料はプルタークからであり、シーザーの性格の欠点はそれからうけいれたものである。ハドソンはアピアン(Appian's History of the Roman Wars both Civil and Foreign, 1578)を、プルターク以外に用いられたものとして考えているが、キットレッヂはそれを否定している。シェイクスピアのシーザーは、プルタークを材料にして1599年頃に執筆しており、その刊本は1623年の第I・II折本だけである。名目上の主人公シーザーの暗殺、アントニーの策略、ブルータスの自殺はプルタ

ークによって世間に知れわたっていることであった。それ故、問題点になるのは、登場人物をたんなる歴史上の人物だけということではなく、我々の中に生きている一人の人間として存在しなければならない。また、彼等の意志決定・判断・行動の一つ一つが我々の人生にどのように生きてくるのか(反映するのか)、みきわめられるものがなければ、悲劇作品の存在する意味はあまり大きくない。

II

諸家の批評のなかには、シーザー精神を中心に描いた作品であるという説がある。その前半は、精神が宿っている肉体を陰謀の徒が倒すのを描き、後半は、その肉体が亡びたあとに生き残った精神が陰謀の徒に復讐するのを描いている。劇の終りになって、ブルータスは、キャシアスの死を前にして次のように叫ぶ。

O Julius Caesar, Thou art might yet!

Thy spirit walks abroad, and turns our swords

In our own proper entrails.

(5. 3. 93—5)

この台詞から、シーザー精神を中心にみれば unity が保たれているが、しかし、劇の内容を論究していくと The Life of Julius Caesar よりも The Life of Marcus Brutus に多く負うところがある。そこで、真の主人公がブルータスということに思えるのであるが、ブルータスの立場を明らかにすることがこの作品を解明する重要な手がかりである。プルタークによるとブルータスはシーザーの不義の子ということになっている。シェイクスピアがそのことを念頭においていたかどうかはわからないが、この劇において、二人が互いに愛情を感じ合っていることは、台詞から判断できる。

ブルータスは

We all stand up against the spirit of Caesar,

And in the spirit of men there is no blood:

O, that we then could come by Caesar's spirit,

And not dismember Caesar!

(2. 1. 167—170)

といっている。

これは、彼が私情(私憤)からシーザーを殺そうとしているのではない。私情においては彼は、シーザーを愛している。私情において愛を感じているブルータスは、シーザー精神を殺さなくて

はならない。私憤からシーザーを殺そうとするキャシウス等とは全くちがうのである。シーザー精神（帝国主義）を殺すに価するのかどうか、帝政（帝国主義）対共和制（理想的政治思想）つまり、「シーザーの肉体と精神」と「ブルータスの私情と理想的政治思想」という対立関係で以下、筋をおって考えてみよう。幕があがる早々我々は、二人の役人が、ポンピーと戦いおえて凱旋してくるシーザーを歓迎しようとする平民を叱りつけているところをみる。

Wherefore rejoice? What conquest brings he home?

What tributaries follow him to Rome,

To grace in captive bonds his chariot-wheels?

You blocks, you stones, you worse than senseless thing!

O you hard hearts, you cruel men of Rome,

Knew you not Pompey? Many a time and oft

Have you climbed up to Walls and battlements,

To towers and windows, yea, to chimney-tops,

Your infants in your arms, and there have sat

The live-long day with patient expectation

To see great Pompey pass the streets of Rome:

And when you saw his chariot but appear,

Have you not made an universal shout,

That Tiber trembled underneath her banks

To hear the replication of your sounds

Made in her concave shores?

And do you now put on your best attire?

And do you now cull out a holiday?

And do you now strew flowers in his way

That comes in triumph over Pompey's blood?

Be gone!

Run to your houses, fall upon your knees,

Pray to the gods to intermit the plague

The needs must light on this ingratitude.

(1. 1. 36—59)

と「偉大なるポンペイの血族を滅ぼして帰るあんなやつ!」, 嘆き悲しみ, さらに, シーザーのためにした飾りなどいっさいつけさせなかった。ひいきにしていたポンペイをシーザーが滅した

ことを怒り、彼の権力の増大を恐れた。二人の反感はシーザーに対してもっているものであって、シーザー精神に対してではない。この場面はシーザー時代のローマの特色がかかされている。シェイクスピアはローマの民衆の移り気を描いている。群衆は英雄（勝利者）なら誰れでも公平に歓迎の意を現わすのであるが、この事件を、別のめでながめている者達がある。ある意味では、この時代は、ハムレットでいう一切のものの関節がはずれている Time is out of joint なのである。政治的環境として、同じローマ人に勝ったが敵国に勝ったかのように喜ぶとは、共和精神に欠けているといえる。共和制（理想的政治思想）を適応していくには現実的条件が困難であることをシェイクスピアは示唆している。シェイクスピアは互に対立する観念をもっているブルータスとキャシウスを登場させる。ブルータスは君主体制（帝政）をきらい、共和体制を好んだ。キャシウスは君主体制よりも君主をにくんだ。すなわち、シーザーをにくんだのである。要するに、彼が刺激されるのは権力でなくて権力者をにくんだのである。また、キャシウスはシーザーと比較して人間として劣りはしないと意識している。何故か、タイバー河で二人が泳ぎの競争をした時、疲れはてて救いを求めたとか、おこりにとりつかれるとがたがたふるえた。と彼の見解は低俗である。これは、プルタークの材料をシェイクスピアがシーザーの弱点としてそのままとり入れたものである。一方ブルータスは哲学的で理論的であって、実践的実際のな面に劣っている。

Yet I love him well

.....

If it be aught toward the general good,

Set honour in one eye and death i'th'other, and I will look on both indifferently:

For let the gods so speed me as I love

The name of honour more than I fear death

(1. 2. 82—9)

彼はシーザーを愛しているが、しかし、国家全体の名誉のためには正義に味方し、死をもいとわないのである。

また、ブルータスは

Brutus had rather be a villager

Than to repute himself a son of Rome

Under these hard condition as ths time is like to lay upon us.

(1. 2. 172—5)

自分に課された任務の重大さを感じ、自分が悲劇の主人公とならねばならぬことを予知していた。彼はシーザー精神（帝国主義）が危険だと思う。しかし、その精神は、その肉体に宿っているのであるからその肉体を滅ぼさなければならない。このような悲劇的苦悩は、ハムレットのそれに似

ている。キャシウスにとってブルータスという高潔な士をシーザー暗殺の仲間に入れることが立派な大義名分が立つと考えていた。しかし、尋常では参加しそうもないので、卑怯な手口で誘惑しようとする。キャシウスによると、「決して誘惑されないほど堅固な人は……ない」ありえないからである。高潔なブルータスは、他人を誘惑したことがないから、他人が自分を誘惑するなどということは考えてもみないことである。だから誘惑にすぐひっかかってしまう。正義の人ブルータスの公憤（理想的政治思想）とキャシアスの私憤とが、シーザー暗殺の目的にむかうのであるが、結果は、高潔の士で志操堅固な人物ブルータスは陰謀者の一味として討たれた。さて、ブルータスの独白は、

It must be by his death: and, for my part,
I know no personal cause to spurn at him,
But for the general—he would be crowned:
How that might change his nature, there is the question
It is the brightest day that brings forth the adder;
And that craves wary walking …… Crown him! -that!
And then, I grant, we put a sting in him,
That at his will he may do danger with.
Th'abuse of greatness is when it disjoins
Remorse from power: and, to speak truth of Caesar,
I have not known when his affections swayed
More than his reason.

(2. 1. 10—21)

この独白については、コウルリッジ⁽²⁾やハドソン⁽³⁾が問題としている。この台詞をみたす条件が設定されていないからであるが、ブルータスは、シーザーを足蹴にする個人的理由の一つもない。王になりたがっているという野心を持っているから、その野心が増大しないうちに「卵の殻の中にいるうちに殺そう。」と彼は考える。しかし、暗殺を予想や予感で行うわけにはいかない。結局、シーザーを殺す意志が熟してきたものの

Since Cassius first did whet me against Caesar
I have not slept
Between the acting of a dreadful thing
And the first motion all the interim is like a phantasma or a hideous dream:

(2. 1. 61—5)

睡眠まで奪われる程悩んでいるのである。この台詞から、我々の心に、あるマクベスの、決断に

苦悩するハムレットの、陰うつに考え込んだような声が聞こえてくる。

二幕一場にはじまるブルータスの言葉は、良い人が悪くなるかもしれないという理由で、その人を殺すということは道徳的には是認することはできない。よくなるとかわるくなるとか未来のことなど誰れにもわからないのに（神仏のみしる）、勝手に悪くなるのではないかと決めこんでしまい暗殺することは極めて不謹慎であり、異常なことである。これがブルータスの最後の決定的な誤りとなる。このことはブルータスの知的欠如を意味するものである。L・Cナイトは次の台詞を重要な要素と考えている。⁽⁴⁾

Indeed, it is a strange-disposed time:

But men may construe things after their fashion,

Clean from the purpose of the things themselves.

(1. 3. 33—5)

シセロの台詞である。これは劇全体の原形であって、ブルータスの観念も象徴的に表現されているものであるといえる。要するに、彼の観念は知的対象というよりむしろ感じたままの対象である。すなわち、彼の理想が性急な行動をもってシーザー精神に挑戦したために結果はうまくいかないのである。一方、シーザーは、カルパーニアが不吉な天変地異を数えあげ、それらがシーザーに凶であることを告げ、元老院（外出）への出席をおもいとどまるように頼むのに対して

Cowards die many times before their death;

The valiant never taste of death but once

Of all the wonders that I yet have heard,

It seems to me most strange that men should fear,

Seeing that death, a necessary end,

Will come when it will come.

(2. 2. 23—69)

こうした言葉は明らかに強がりであるかはコンテキストからわかることである。その証拠には、カルパーニアが「あなたの知恵は自信のためにすっかり減ぼされました。今日はお出かけになってはいけません。あなたではなく私が心配して、あなたを家に引きとめたとおっしゃって下さい。マーク・アントニーを元老院へやって、今日はあなたの気分がすぐれないと言わせましょう。こうして、膝まずいてお願いいたします」と、

「マーク・アントニーに、私は気分がすぐれないと言わせよう。そして、あなたの気休めのために、家にいることにしよう。」やはり、出かけるのがこわいのである。デシアスが迎えにくると、シーザー独特のえらがりを使う。デシアスは、シーザーの妻のいう警告や前兆や差し迫った災害は、吉兆であるという意味の方向で言葉巧みにシーザーに説いて聞かせ誘い出すわけである。こ

のような点からみても、シーザーが史上にみるような偉大な人物として描かれていない。このように、ものごとの決断のなさを暴露しているのである。しかし、シーザーの立場は、このシェイクスピア作品中では優位な立場にいる。それが彼の野心の増大につながるのではないかと陰謀者たちは考えている。彼等にとってシーザーの存在は悪しきものであると考えている。陰謀者たちの中には、シーザーの野心というより、本当は彼そのものの存在が邪魔なのである。

シェイクスピアのシーザーの描き方に非難する批評家も多いが賛成している人もいる。

たとえば、ハリソンは作者の意図するところは、シーザーの側でなくて、キャシアスら陰謀者たちの側の眼で描いているのだとのべている。さて、アーティミドラスが陰謀のことをしらすために手紙をシーザーにわたすのであるが

What touches us ourself shall be last served.

(3. 1. 7)

と答える。彼の助かるチャンスが去ってしまった。支配者たる最高の立場を意識した言葉である。帝国主義を内面にひめて、優位な立場にある。それは自己存在を意識した言葉である。このあと、シンバーのための赦免のやりとりがあり、ついにシーザーが倒れるわけである。ここで有名な台詞

Et tu, Brute? Then fall, Caesar!
(6)

(3. 1. 77)

「さがれ、オリンパスの山を動かすのか」につづく上の言葉は、シーザーにとって、坂のころげおちる石ころの思いではなかったろうか。理想と現実をはっきり区別してこれなかった結果ともいえる。これは、ブルータスにもいえることで、彼も、私情でなく理想的政治思想でシーザー精神を殺すとねがうのであるが、結果はシーザー精神によって生命をたたれることになる。さて、いよいよアントニーとブルータスの対決である。先にもふれたがブルータスが真実を理論的に語る（理想と現実とを混同する）のに対して、アントニーは策士である。まずブルータスの台詞

If there be any in this assembly, any dear friend of

Caesar's, to him I say that Brutus' love to Cæsar was no less than his. If then that friend demand why Brutus rose against Cæsar, this is my answer: not that I loved

Cæsar less, but that I loved Rome more. Had you rather

Cæsar were living, and die all slaves, than that Caesar were dead, to live all free men?

As Cæsar loved me,

I weep for him; as he was fortunate, I rejoice at it;

As he was valiant, I honour him; but as he was ambitious,

I slew him. There is tears for his love; joy for his fortune;

honour for his valour; and death for his ambition.
(7)

(3. 2. 18—28)

はたして、このような地味で、理解に困難な言葉が市民達にわかるであろうか。私情ではすなわち個人では愛し、公人（理想的政治思想）としては憎むいや殺人にまでいたることが彼等にわかってもらえるであろうか。本人でさえ、ハムレット・マクベスのように苦悩にみちていたではないか。それに対してアントニーの台詞

If you have tears, prepare to shed them now.

You all do know this matter: I remember

The first time ever Cæsar put it on;

'Twas on a summer's evening, in his tent,

That day he overcame the Nervè:

Look, in this place ran Cassius'dagger through:

See what a rent the envious Casca made.

Through this the well-belovéd Brutus stabbed;

And as he plucked his curséd steel away,

Mark how the blood of Cæsar followed it,

As rushing out of doors, to be resolved

If Brutus so unkindly knocked, or no:

For Brutus, as you know, was Cæsar's angel:

Judge, O you gods, how dearly Cæsar loved him!

This was the most unkindest cut of all;

For when the noble Cæsar saw him stab,

Ingratitude, more strong than traitors' arms,

Quite vauquished him: then burst his mighty heart:

And, in his mantle muffling up his face,

Even at the base of Pompey's statua (Which all the while ran blood) great Cæsar fell.
(8)

(3. 2. 170—190)

アントニーの長く語られている言葉をみるとブルータスの私情についてふれず、彼の行為のみに終始している。しかもそれを憎むべき行為として、市民に見せつけたのである。ここで先程までブルータスの演説を讃美していた市民は、アントニーの策略にのせられてしまう。これでブルータスの運命に決着がついたのである。ブルータスはアントニーを limb of Cæsar とみくびりすぎていたのである。すくなくとも、アントニーにはブルータスの「私情と理想的政治思想」とい

う関係を悩んでいることがわかっていたはずである。そのことを理解しながら策士アントニーは逆手を取り、前記のような演説をはじめ、群衆の心をつかんでしまったのである。また、アントニーは群衆の移り気の心理を巧みに利用したものであると考えられる。

シーザーの死を聞いたオクテヴィアスはいそぎ帰ってきて、アントニーとともにシーザーの弔合戦をすることに意見が一致する。一方、ブルータスは、仲間に賄賂をとったものがあり、キャシウスがその者をかばったことではげしく非難する。ブルータスは、自分が私情を殺し、公憤として公の正義の戦いであるはずなのに仲間うちに名誉を汚すものがいるのにたえられないのである。

Remember March, the ides of
 March remember!
 Did not great Julius bleed for justice' sake?
 What villain touched his body, that did stab,
 And not for justice? What, shall one of us,
 That struck the foremost man of all this world
 But for supporting robbers, shall we now
 Contaminate our fingers with base bribes,
 And sell the mighty space of our large honours
 For so much trash as may be graspéd thus?
 I had rather be a dog, and bay the moon,
 Than such a Roman.⁽⁹⁾

(4. 3. 19—28)

革命がこのような不正によって汚がされたことをなげくのであるが、話題はブルータスがキャシウスに金の借用を申し込んで断られたことにうつると簡単に例の不正のことは口にしなくなる。しかし、理想的政治思想（革命）をめざすブルータスがことのはじまる早々不正を許すことになり、人心一新の意味は無意味なものとなる。すなわち、帝国主義から共和制への変革の努力が何を意味していることになるかである。ブルータスの行動には信念がみられないことは事実である。それがなければ革命なんてことはうまくいくわけがない。自由を愛し、平和を愛するブルータスがこのような行動に至ったことは賢明でない。ほかに方法があるはずである。

このあとシーザーの亡霊がブルータスのまえにあらわれる。「やがてフィリパイで会おう」と彼をぞっとさせるのである。そして、フィリパイの戦場での戦いの様子がみられるキャシウスは部下のピンダラスに命じて剣を突かせて死ぬ。その死骸をみた。

ブルータスは叫ぶ

O Julius Cæsar, thou art mighty yet!
 Thy spirit walks abroad, and turns our swords
 In our own proper entrails.

(5. 3. 93—5)

彼はシーザーの肉体を殺したが、シーザーの精神を殺すことができなかった。シーザーの亡霊⁽⁴⁰⁾が一度はサーディスで、二度めはフィリパイの戦場であらわれる。ブルータスは死期のせまってきたことを覚悟し、やがて、家来に持たせておいた剣に走りかかり我が生命を断つのである。

Cæsar, now be still:

I killed not thee with half so good a will.

(5. 5. 51—2)

私には、これら一連の言葉をみるとシーザーの復讐と理解できる。内容的にはブルータスが主人公になっているが unity の点から中心をシーザーにおいていると考える。シェイクスピアは二人の人物を史上でなく彼のシーザー彼のブルータスとして描いている。また、彼が二人の対立する考えを表現し、特に、ブルータスの行動面から、革命をおこすためそして成功させるためには知恵と忍耐を必要とするものであり条件の満たされないうちに性急な行動をすることの愚かさを示唆したものと私には考えられる。この悲劇をまえにしてアントニーは

This was the noblest Roman of them all:
 All the conspirators sawe only he
 Did that they did in envy of Great Cæsar;
 He only, in general honest thought
 And common good to all, made one of them
 His life was gentle, and the elements
 So mixed in him that Nature might stand up
 And say to all the world 'This was a man!'

(5. 5. 68—75)

かつての策士はかげをひそめてしまった。そして、ただブルータスの行動をほめるのである。さて、シーザーの肉体は滅んだことは事実である。ブルータスは、私情をすてて理想的革命の道を進もうとしたものの（仲間に不正を行い革命を汚すものの存在がある）シーザー精神によって倒れた。理想的政治思想（革命）は失敗したことになる。さて最後に、筆者は次の関係を思い出す。「シーザーの肉体と精神」と「ブルータスの私情と理想的政治思想」との関係である。ブルータスはシーザー精神を殺すことができずに肉体を殺す。比して、シーザー精神が理想的政治思想を破滅させる。「あゝシーザーよ。君の方は偉大だ。まだ生きているぞ!」「シーザーよ これで君

も成仏しろ」深い意味のこめられたこの言葉はブルータスの理想的政治思想がシーザー精神に敗れた証である。帝政から共和制への変革をおこなう点で機が熟さずして暴力行為に訴えて、すべてをぶちこわしてしまう愚かな行動へのひとつの警告として、作者が示唆したものと理解する。大義名分のために愛するシーザーを殺すブルータスの悲壮感は我々の心まで悲壮的にする。本当に愛しているのなら暴力に訴えなくてもできる方法が別にあったのではないだろうか。シーザーの肉体が減んだが「いいかね、シーザーは間違ったことはしない」という優位な立場にあるシーザー精神がブルータス（私情でシーザーを愛している）の心の中に生きつづけているのである。この世に別れをつけるブルータスは「シーザーよ、さあ、これで成仏しろ」と。事実上シーザー精神に復讐されたブルータスの最後の姿であるこの反省ともいうべきこの言葉は、理想的政治思想を達成するのにはあまりに性急な暴力行為に訴えた行動、また、忍耐と知恵を働かせることの欠如が理想とする政治の達成を中途にして断念する結果となることを意味するものである。

シーザー精神にブルータスの肉体が減ぼされるわけである。ただ、ブルータスのとった行動がすべて無駄であるわけではない。そこにはシーザーの行動の歯止め役としてのブルータスの存在の価値があり、彼の精神は生存している人達の心の中に生きているはずである。二人の精神は、これから先、永遠に滅びることなく続くであろうし、永遠に対決していくであろう。この二つの精神は、我々の現代生きている世界に対決という型で生きているし、人間がこの世に存在するかぎり生きつづけることであろう。

この作品は、二人の人物の存在とその二人がもつ精神（対立する思想）とがおりなす世界で、我々に政治というものの意味とその立場にある人間の性格を作者シェイクスピアが登場人物を通じて語りかけ教示してくれている。

註

- (1) フランス革命に最大の精神的刺激を与えたのはギリシャと共和制ローマの歴史であったプルタークの描くところの理想化された人物像リウウス語るところの英雄的冒険、これらは十八世紀の心ある人々をして、自分たちの時代は腐り切った時代でこういう腐敗の根源は一掃されねばならぬと感じさせた。革命を準備するのに最大の貢献をしたモラリストはジャン・ジャック・ルソー(1712-78)であった。彼は驚くほど多くのラテン作家を原典や翻訳で読んでいたが最も深い影響を与えたのはプルタークであった。彼が「英雄伝」をアミヨの仏訳で読んだのは6歳の時であった。

The Classical Tradition. G. Highet, Oxford p. 145-6.

- (2) Coleridge's Shakespearean Criticism, ed. T.M. Rayson (Constable) (1930), Vol. 1. p. 16
- (3) H. N. Hudson, cited, The New Shakespeare, Julius Caesar. Introduction (Cambridge) p. 20
- (4) L. C. knights, An Approach to 'Hamlet', (Chatto 1960) p. 24
- (5) G. B. Harrison, Shakespeare's Tragedies (Routledge 1963) p. 70
- (6) 「ブルータス、おまえもか?」の出所は、スエトニウス「シーザー列伝」が、ギリシャ語で「して汝、

わが息子もか」による(プルタークにはない。)

Et tu, Brute というラテン形は、シェイクスピア当時シーザーの死がラテン語劇や英語の劇で数多く取扱われ、それらに上記スエトニウス記載の臨終の言葉の記述のラテン語訳が常に使用され、シェイクスピアの記憶にあったのと思える。

シェイクスピア全集、悲劇Ⅰ 筑摩書房 p.181。

- (7) ブルータスの演説は理論的で市民に受けいれられそうもないものである。文は散文になっている。
- (8) アントニーの演説はブルータスのそれを逆手にとって、暴力行為のみについて語る。それは具体的で感情的である。無韻詩形である。
- (9) 月にむかって吠える。これは萩原朔太郎の詩集「月に吠える」の出典であろう。
- (10) プルタークで現われるのはシーザーの亡霊とはでていない。「恐ろしい物の姿」とあって、ブルータスの問いに「ブルータス！ 汝の悪霊 evil spirit」と答えている。
- (11) The Imperial Theme, G. Wilson, Knight, (University Paperbacks 1963) 参照。
- (12) テキストはケンブリッジ版を使用する。